第三部　古本系諸本から流布本系諸本へ

―流布本系諸本の初期的問題―

第一章

内閣文庫本の考察

はじめに

内閣文庫本は、流布本系統に分類されるが、その裏書の多さから、従来は渡辺の分類による広本系統に含まれる伝本であるとされてきた。ここでは裏書の性格を重点的に考察した上で、内閣文庫本の位置づけの再検討を試みたいと思う。なお論の中で使用する説話番号は、資料編「内閣文庫蔵『沙石集』翻刻」によるものとする。

第一節　内閣文庫本の構成

一、書誌

内閣文庫蔵『沙石集』（特一二〇―八）全十冊は、従来の研究において「内閣第一類本」と「内閣第二類本」とに分けて記述されている本である。しかし、内閣文庫においては両者を一括して保管しており、また後述の通り一具の写本として調えられたものでもあるので、ここでは全体を合わせて考察することとした。

まず簡単に書誌を記す。同本は写十冊、縦二三・五センチ、横一六・三センチの袋綴本。本文料紙は楮紙。縹色無地の紙表紙を付す。各冊に題簽「沙石集　一（～十）」あり。現在の表紙・題簽は後補のものである。また、第一冊表紙の右上に「南」（白筆）、「廿四」（朱筆）との注記があり、旧蔵時の函架記号と思われるが、詳細は不明。この表紙が付された後にかなり虫害を蒙ったようであるが、現在は丁寧に補修されている。補修の時期は近代になってからであろう。

各冊は表紙を付さない状態で伝わった時期があるようで、現在見返しとして表紙に貼られている丁のオモテ面に「昭慶」なる人物の署名が記されているのが表紙と見返しとの間の隙間から覗くと看取できる。第二冊に「沙二　昭慶」、以下第三・第六・第七・第八・第十冊に同じような巻次注記と署名がある。第一・第四・第五冊にはないが、それはこの三冊が補修に際してもとの見返しを取り去って新たな見返し紙を補ったからである。従っ

て、本来は全十冊にそれぞれ存したものであろう。この「昭慶」について渡辺綱也は東京大学国語研究室蔵の法華音義（永正十七年の奥書あり）の表紙にやはり同じ署名があることを報告しているが、それ以上のことは不明である。

各冊の冒頭に蔵書印「書籍館印」「浅草文庫」「日本政府図書」「内閣文庫」がある。書籍館以前の伝来については（「昭慶」が所持していたことはわかるが）不詳。

以上は全体の概観であるが、既に知られているように、内閣文庫本は室町末期写と思われる六冊（すなわち「第一類本」）と、江戸初期頃写の四冊（「第二類本」）に分かれる。この点について次にいくらか補足したい。

＊室町末期写の巻々―巻一・巻二・巻三・巻四・巻五・巻九

巻一　墨付二七丁。一面一一行書き。
巻二　墨付四九丁。一面一〇行書き。
巻三　墨付四一丁。一面一〇行書き。
巻四　墨付三九丁。一面一〇行書き。
巻五　墨付五一丁。一面一〇行書き。
巻九　墨付三二丁。一面一一行書き。

このうち、巻一・巻二・巻四・巻五・巻九は同筆であるが、巻三のみは異筆である。また別筆の朱で、「二類本」を含めた全十巻にわたり他本による校合・補訂がなされている（すべて一筆）が、これは江戸後期頃のものと思われる。校合の際に使用されたのは本文から見て刊本だったと推定できるが、古活字本を初めとする諸版のどれを用いたかは（ほとんどどれも同じなので）まだ確認できていない。翻刻では朱筆を（　）に入れて示してある。

従来この六冊は、巻三の四一丁裏に「天文十一年迫月十四日書畢也」、巻四の三九丁表に「天文十二年三月廿四日書畢」という識語があることから、天文年間の書写本であるとされている。しかし、巻三、巻四ともに、識語の左一行ほど空けた辺りで、料紙が縦に切られており、別の白紙を継いである。これは天文奥書の後に、何か記述があったものを、取り除いたのであろう。同様の紙の貼り継ぎは巻二、巻七にも確認でき、巻七では切り取った線の右側にもとの墨痕がはみ出して残っているので、おそらく署名か花押の一部であったと推定できる。このような切り取りが行われている場合、本来はこのあとにさらに新しい年次の書写奥書があったが、当該写本の書写年次を古く見せるために、それが切り取

られたという可能性を一応考慮しなければならない。

しかし、「一類本」に関して言えば、書写年代が天文から大きく下るとも見えないので、作偽を施してもあまり有効ではない。むしろ旧蔵者の署名か花押が巻末毎にあったのを嫌って、その部分を切除したと見るほうが妥当であろう（旧蔵印を切り取ったり、旧蔵者の署名を墨で抹消してある写本はよく見かける）。この切り取りが見られない巻では、最終丁の最後まで本文が書写されているため、恐らく旧蔵者署名は次の丁か後見返しにあったものと考えられ、それらはわざわざ切り離す手間を掛けずに丁ごと取り除いてしまったのであろう。その場合、巻三や巻四のような天文の書写奥書があったとしても、一緒に廃棄されてしまったと想像したい。結局、「一類本」の書写時期は従来どおり天文十一（一五四二）年から十二年頃と考えてよいものと思う。

「一類本」は二人の書写者ともにかなり読みにくい筆跡で、明らかな誤写も非常に多い。これまで本写本を底本として翻刻したものには、岩波文庫「拾遺」と日本古典文学大系「拾遺」があるが、どちらも通意のためにかなり本文に手を加えている。今回資料編として収録した翻刻では、忠実に原態を示すことに価値があると考え、明らかな誤写も校訂をしていない。ただし判読困難な字を意味の通る方向で解釈した場合はある。

なお、「一類本」は所々に大小さまざまの空白箇所がある。実際に写本を見てみると、料紙に漉きむらがあり、紙が薄くなってしまって字が書けない所を空けた結果であることがわかる。従って、空白を越えて文は連続しているので、今回の翻刻では空白を一々表示せず、続けて翻刻した。

＊江戸初期頃写の巻々―巻六・巻七・巻八・巻十

巻六　墨付三九丁。一面六行書き。

巻七　墨付六四丁。一面六行書き。

巻八　墨付五三丁。一面六行書き。

巻十　墨付四三丁。一面六行書き。

四冊とも同筆である。「一類本」と同様、別筆による朱で全巻校合・補訂されている。料紙は、薄くて漉きむらの多い「一類本」群に比べ、より厚手の楮紙。書写は「一類本」より下って、江戸初期と見られる。

「一類本」も「二類本」も、補修ののち改めて装丁するに際して、上下を若干裁ち落としている。そのため本来の寸法は知りえないのだが、現状では同寸法である。また、一行

の字高もほぼ同じと見なせる。従って、両者は無関係に写されたものではないであろう。つまり、無関係な二種類の『沙石集』写本が取り合わされたものではなく、「一類本」が写された後に、その欠巻を補うために写されたのが「二類本」であると考えられる。当初「一類本」が全巻揃っていたのか、「二類本」が何を底本として写されたのか（「一類本」のセットから、何かの事情で四冊のみを誰かに割譲し、その際複本として控えを作ったのが「二類本」、というような可能性もある）といった問題はあるが、詳細は不明である。

二、内容

内閣本の性格を考察するには、翻刻において対応番号を付して記したように、米沢本との比較が不可欠である。米沢本は『沙石集』伝本の中でも古態を遺す十二帖本であり、無住の度重なる改訂の影響が少ないと思われる完本だからである。また同時に、無住が改訂作業の末に到達した『沙石集』の姿を留める本として、刊本との比較も必要とされる。米沢本と刊本の本文形態を常に意識して比較することは、内閣本の本文がどの段階を経たものか、また内閣本の独自性がどこにあるのかを理解するために、有効な手段となり得る。ただし、米沢本・内閣本・刊本の間では、巻六以降、巻次構成に違いがあるので、先に混乱のないように整理しておきたい。

米沢本	内閣本	刊本
巻六	巻六	巻六上
巻七	（欠）	巻六下
巻八	巻七始	巻七上
巻九〔～十二〕	巻七終	巻七下
巻九〔十三～〕	巻八	巻八
巻十本〔～七〕	巻九上	巻九上
巻十本〔八～〕・巻十末〔～十一〕	巻九下	巻九下
巻十末〔十二〕	巻十始	巻十上
巻十末〔十三〕	巻十終	巻十下

内閣本では、米沢本の巻七、刊本の巻六下に相当する部分が欠巻となっている。内閣本

と刊本の巻次構成は同じであるが、それに比して、米沢本はかなり複雑な構成となっている。巻八が他本の半巻分と短いかと思えば、巻九は一・五巻分に相当した長大な巻となっていて、巻の分量比にまで考慮が及んでいない。今回の翻刻では米沢本との比較を新全集の番号で示したが、〔　〕内の一々に巻数を明記していないので、巻六以降は右表で米沢本の巻数を確認する必要がある。各々の巻の最初に脚注として米沢本での巻数を示しておいたので、あわせてそちらも確認してから翻刻の当該番号を参照してほしい。

さて次に、内容の細かい検討に入るため、内閣本にあって米沢本にない話を説話番号で示し、適宜刊本との比較を行う。内閣本で「裏書」の標示があるものは太字で示す。（＊印は「二類本」）。

巻一　**64**〜**71**
巻二　**78**・83・84・**90**・**94**〜**96**・**106**〜**118**・120・129・133〜135・**136**〜**139**・**144**〜**149**
巻三　**164**〜**175**・177・183・184・186・187・**189**〜**193**
巻四　**204**・213・**219**・**220**・**223**〜**225**
巻五　234・241・252・**260**〜**265**・**339**
＊巻六　361
＊巻七　396〜398・414・419
＊巻八　423・425〜429・433・434・437・439・444・446・448・450・454・456・457・459・463〜465・468
巻九　517・532
＊巻十　**536**・**537**・547・**554**・556・557

※ただし、537・554は米沢本に一部あり。

まず右から明らかなことは、「裏書」という標示のある話が「一類本」に圧倒的に多いことである。このうち64〜71のように、連続して数話が裏書となっているのは、巻末にまとめて「裏書云」として収録されているものであり、数字が断続的なものは、本文の各章段の末尾にまとめられたものである。この裏書については後述するとして、まずは内閣本の本文系統を考えたいと思うが、系統が異質であるため、「一類本」と「二類本」に分けて考察する。

Ⅰ一類本

裏書を除いた場合、米沢本になく内閣本にある話は全一八話である。そのうち、刊本に

も共通する話は、120・129・133〜135・177・183・184・186・187・213・234・241・252・517・532の十五話であり、ほとんどすべてが刊本にも存在することがわかる（133〜135は内閣本・刊本では「菩薩之利生代受苦之事」と題した一章段であり、米沢本ではその全体を欠く）。従来の広本・略本という分類方法では、この裏書の多さが説話数の多さに繋がり、広本系とされてきたが、本文の新旧でとらえると、裏書を除いた内閣本本文部分が流布本系であることはまず間違いない。説話の配列や標題の異同を見ても、内閣本は刊本に近似することが明らかなのである。

Ⅱ二類本

二類本は、すでに渡辺に指摘[*1]があるように、刊本と同一系統である。ただし本文の細部は異なるので、刊本の写しではない。刊本との大きな違いを述べると、内閣本巻七の389と390の間に、刊本は内閣本巻五279後半にある二説話を載せること、内閣本巻八の424〜429について、刊本の順序は424・425・427〜429・426となり、426を新たに「鳥獣恩知事」と題して独立させていることである。内閣本にはない標題が新たに付加されることは、巻十にも確認できる。また、巻十の548の「此僧」の横に、「建長寺ノ初長老道証禅師也。南海ト云道号」と、刊本には見られない傍記が、本文と同筆で見られる。この他、経典の引用において、注目すべき増補が見られるが、それについては後述する。

*1　岩波日本古典文学大系『沙石集』解説30頁